

東南アジア研究センター

昭和39年度第3・四半期報告

第3・四半期。9月10月のあいだに、東南アジア研究センターの活動はますます活発の度を加えている。

調査研究計画について。マラヤのアロー・ジャングスの予備調査をおえて、棚瀬襄爾助教授と大学院学生坪内良博（文）が帰国した。現地では口羽益生竜谷大学講師が調査を続行中である。その他、園部逸夫教授（法）はタイを中心にした比較政治学の研究を行い、10月28日帰国、尚、藤吉慈海（人文、助手）が11月13日より東南アジアにおける仏教教団の実態調査のためタイに向う。自然科学部門の調査もようやく軌道に乗りはじめ、9月30日から3日間にわたるマラヤ稲作シンポジウムが比叻山ホテルで行われた。この会合は農林省・海外技術協力事業団と東南アジア研究センターとの共催で行われ、参加者は約75名にのぼり、連日熱心な討議があって成功をおさめた。この内容は、本誌次号を特集号として公表されることになっている。医薬班では寺松孝助教授・前川暢夫助教授が11月末にタイを訪問し、結核調査の打合わせをするほか、西占貢教授・戸田円二郎副手（医）がタイその他における癩研究のため、11月中旬にタイに向うことになった。地学班では森山徐一郎教授（工）が砒床の現地調査を行い、10月末に帰国。なお滝本清教授・吉住永三郎教授（工）が非鉄金属砒床の研究と、物理探砒の打合わせのため近日中にタイ、マレーシアに出発する。これらの報告は研究例会および本誌に発表される。

バンコック連絡事務所からは、所長として滞在中であった相良惟一教授（教育）が9月30日に帰学、代って本岡武助教授（農）が出発した。

養成計画としては昭和40年度の留学生を募集し、目下考査中である。**交流計画**としては、バジリー招へい教授の講義「東南アジアの政治」が多数の聴講生をあつめている。**現地語セミナー**がはじめられ、タイ国の留学生パイラット君を中心とするタイ語会話コースがはじめられた。インドネシア語も近日中に発足する予定である。

HRAF 室の計画・出版計画・センター 制度化の問題も募金計画とともに各位の御支援によって進展しており、昭和40年度には、さらに活発な人文科学、自然科学両部門の調査研究が予期される。

昭和39年11月

京都大学東南アジア研究センター

所長 岩村 忍